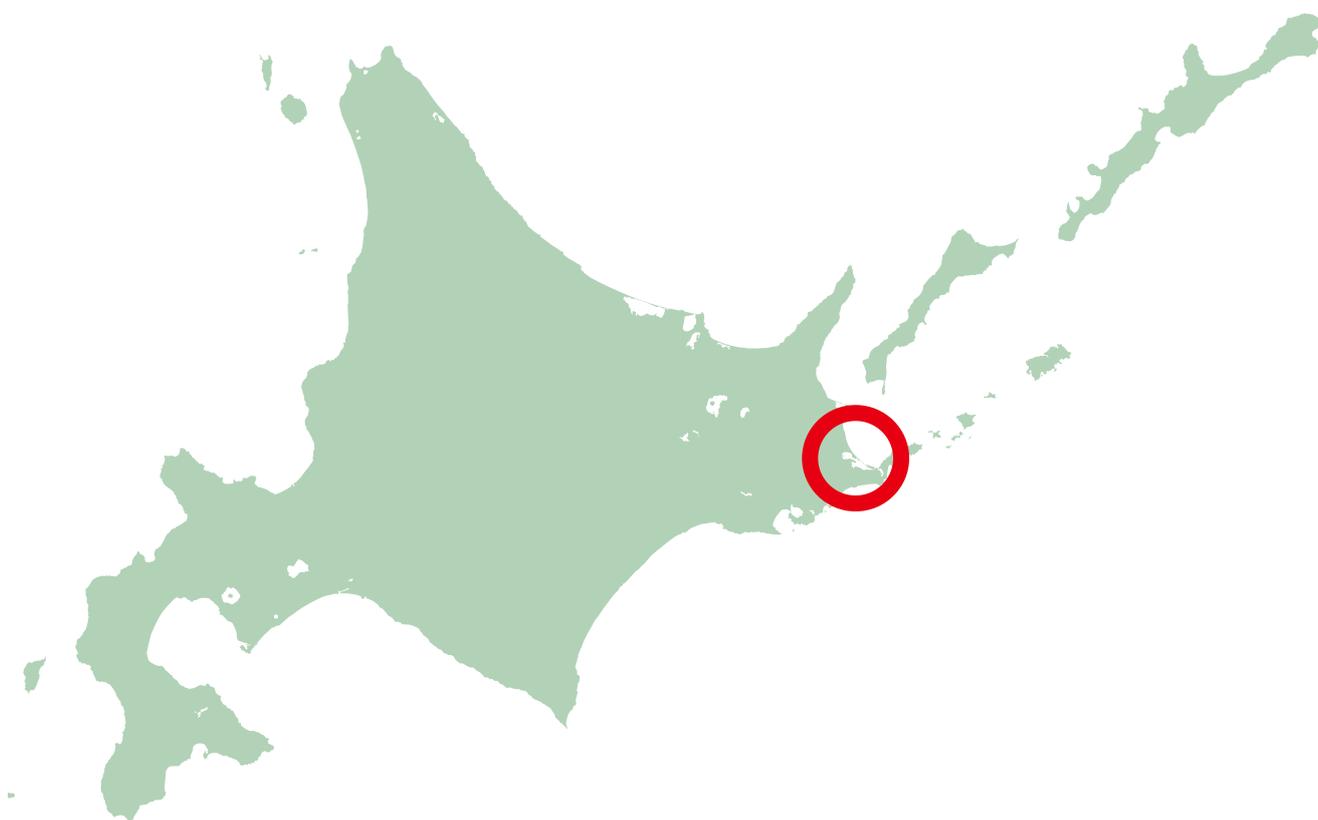




あなたにぴったりの湿地は

ふう れん こ しゅん くに たい
風蓮湖・春国岱



こんなところ ↓

風蓮湖・春国岱



古南 幸弘（（公財）日本野鳥の会 春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンター）

自然の概要

風蓮湖は根室半島の付け根に位置する、面積約 5,600 ha の日本で 13 番目に広い湖である。東西は約 20 km あり、西側から延びた砂嘴・走古丹と、その東方に延びた砂嘴の断片（バリアー島）・春国岱によりオホーツク海からへだてられる。中央部と南東端で海水が出入りするため、淡水と海水の混じる汽水湖だ。水深は平均約 1 m と浅く、湖内にはアマモ場が広がり、干潮時には広い干潟が現れる。

湖岸には人工護岸がほとんどなく、湖に注ぐ 13 本の中小河川の河口部に湿原やアッケシソウなどの生育する塩分の多い湿地（塩性湿地）が見られる。湖面や干潟にはガン・カモ・ハクチョウ類やシギ・チドリ類など、多くの種類の水鳥が渡り途中で数多く立ち寄る。湿原やその周囲の森林では、タンチョウ（→p.22）やオジロワシ（→p.31）などの絶滅のおそれのある種を含む多くの鳥類が繁殖する。冬はロシアから飛来するオオワシの国内有数の越冬地にもなっている。

春国岱は長さ約 8 km、最大幅 1.3 km、面積約 600 ha の細長い島で、この中に湿原、草原、塩性湿地、森林など道東沿岸部で見られる様々な環境がそろっている。初夏の観察路をたどると、ウミネコが群れ飛ぶ海辺から、ノビタキのさえざる草原やタンチョウが闊歩する湿原を経て、ルリビタキの住む針葉樹林にわずかな時間で行き着く。その間、約 1 km。

この変化に富んだ生態系は、複雑な地形により生まれた。春国岱は、並行する 3 列の堤防状の地形（浜堤）から成りそれぞれの成立年代が異なる。最も陸側の浜堤は 800 年ほど前の巨大地震後に、海流により堆積した海底の砂が隆起してできたと考えられ、現在はアカエゾマツやトドマツなどの針葉樹と、ミズナラなどの広葉樹の入り混じる巨木の森になっている。中央の浜堤は 400 年ほど前の地震で隆起したと考えられ、砂丘の上にアカエゾマツ林が生育する世界的にも例を見ない森林になっ

ている。浜堤と浜堤の間は低くなっていて、湿原や塩性湿地が見られる。海に面した浜堤では海流が運ぶ砂による堆積が現在も進んでおり、砂浜から砂丘にかけて様々な背丈の草原が生育している。

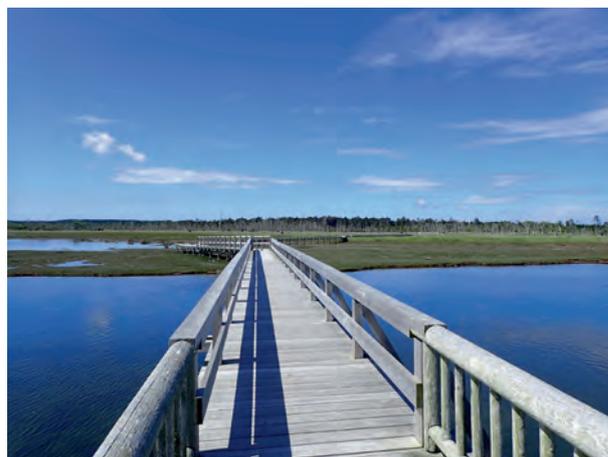


風蓮湖東端と春国岱の全景

左から順に成立年代の古い 3 本の浜堤が海と湖をへだてている



風蓮湖岸には原生的な風景が広がる
最大の流入河川、風蓮川河口上空を飛ぶヒシクイの群れ



湖、塩性湿地、泥炭湿原を望む春国岱の木道
奥に春国岱の語源となったアカエゾマツの林が見える



早春と晩秋にはオオハクチョウやカモ類などの
水鳥の群が渡り途中に風蓮湖に立ち寄ってゆく



湖岸の森林はオジロワシや多くの森林性鳥類の生息地
地盤沈下による立枯れ木も見られる

人との関係

春国岱の語源はアイヌ語「スルク・ニタイ」=「エゾマツ・林」に由来する。

風蓮湖と周辺の海域は豊かな水産資源にも恵まれており、ホッキ貝やアサリ、コマイ、ワカサギなどの漁が盛んである。干潟ではアサリ掘りをする漁師の隣でタンチョウやオジロワシが食べ物を探している光景もよく見られる。また、凍結した湖でコマイ等を捕らえる氷下待ち網漁（→p.96）の際、氷の上にこぼれる雑魚を狙ってオオワシやオジロワシが集まる姿は、冬の風物詩になっている。風蓮湖と春国岱では340種にも及ぶ鳥類の生息が確認されている。水鳥の種・数とも多いことから、2005年にラムサール条約湿地に登録された。また、東アジアを南北に行き来する渡り鳥の通り道（フライウェイ）を守るための[東アジア・オーストラリア地域フライウェイ・パートナーシップ](#)にも2010年から参加している。

春国岱を見渡せる台地上には、春国岱の自然環境保全と環境教育的活用のため根室市が設置した春国岱原生野鳥公園ネイチャーセンターがあり、レンジャー（自然専門職員）により自然環境の調査や、利用者への情報提供を行っている。



高層湿原